

田・賽ノ神・鳥屋崎の3遺跡が古くから注目されてきた。このうち沢田遺跡は昭和27・31・47年の3回にわたって発掘調査され、中期の円筒上層式を主体とした土器や右鎌・石斧などの遺物と竪穴式住居址が確認されている。後期に属すとみられる賽ノ神遺跡は、発掘調査の前に開発化の波の中で破壊に瀕している。三倉鼻のオト洞窟にも貝塚があったというが、未調査である。

〔古代〕秋田郡率浦郷

律令国家が統一的な基準で掌握した日本海側の最北地、「出羽国秋田郡率浦郷」(和名抄)が、当町と五城目町に属したと考えられている。五十目と浦大町の地名は率浦郷の名残という。阿倍比羅夫の「北征」以来の経営によって建置され、秋田城や石崎官衙施設によって管轄された郡郷である。八郎潟を舟泊りにした阿倍船団は、当町の古名「蝦夷湊」(夜叉袋)にも碇泊したと口碑されている。郷編成後も俘囚共同体は存続し、ときに抵抗する。元慶の乱(878年)の「戦地大河村」(三代実録)は、馬場目川河口の村ということで、当町域も含んでいたかともみられている。ともかく高岳山以北が蝦夷地なので、律令国家が当地域の開発にはかなり力を入れたことが想定される。高岳山信仰はそのあらわれであり、真坂地区の沼沢地から発見された瑞花双鳳八稜鏡などの平安鏡2面や、上昼根・蒲沼から出土する土師器・須恵器なども、そのような歴史の断面を示している。

しか〔中世〕

大河兼任けんじんの地盤

平安後期の清原氏時代には新方二郎橘頼貞が、平泉藤原氏時代末期には大河次郎兼任が、この一帯を基盤に勢力をもっていた。文治5年(1189)に鎌倉幕府が秋田郡地頭職に伊予三国出身の御家人橘公業を補任し、それまでの領主の権限を制約したことから、大河兼任らの大反乱となった。「吾妻鏡」が記す「大方の志賀渡」の軍事行動については、当町の蝦夷湊とか三倉鼻沖とかまたは鹿渡を(琴丘町)とか地名が詮索されているが、いずれにせ

よ反乱鎮圧後の処置は厳しいものであったらしい。高岳山を背後にする浦城はこの頃から整備されたのではないだろうか。

板碑製作の地戦国期になるまで、中世の地頭名も村落名も未詳である。しかし、暦応3年(1340)銘の板碑をはじめとして、総数50基余の14世紀の板碑群が当町各域に現存する。小池地区の萱戸屋と夜叉袋・真坂地区に特に多い。紀年銘の分はすべてが北朝年号であり、梵字は金剛界大日と阿弥陀三尊が大部分を占めている。特に注目されるのは、石材がすべて当町筑紫岳の石英安山岩であり、同石質の板碑が湖東部および湖西部(若美町)一帯に分布しており、筑紫岳麓に板碑製作の集団が生活していたことを暗示している点である。南北朝内乱期の社会経済史を考えるうえでも注目すべき遺物群である。

浦城の盛衰

浦城の館主は長い間千葉氏であったが、戦国末期に湊安東家と結託した三浦盛永が台頭し、城をのっとり、当町域一円および五城目町の大半をも支配した。し天正15年(1587)から勃発した湊・檜山両安東家の内紛に巻き込まれ、盛永は滅んだ。その子盛季はのちに平野部の押切村に築城し、父の旧領を治めようとしたが、家臣小和田甲斐の讒言にあい落命したと伝えられる。この頃によく当町域の村落が史料上に全貌をあらわす。天正19年秋田実季が豊臣秀吉から当知行を安堵された村々の中に、一市(一日市)・川崎・八幡林・蒲沼・新堀・押切・真坂・立すミ湊・浦町・一向堂・小池・夜叉袋の12か村1,560石余が記載されている。太閤蔵入地はなく、すべて実季領と認定されており、秋田家では家臣鎌田河内や栗沢弥五郎を代官に命じてこの村々を管理し、検地のやり直しによって慶長6年(1601)には1,800石余と掌握するに至っている。なお、中世に開かれた寺院では、一日市の曹洞宗清源寺、小池の曹洞宗陽広寺、浦大町の真言宗東谷寺常福院が名高い。

〔近世〕